



TITLE:

トマス・モアユートピア研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

伊達, 功

CITATION:

伊達, 功. トマス・モアユートピア研究. 京都大学, 1967, 経済学博士

ISSUE DATE:

1967-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212068>

RIGHT:

【 14 】

氏 名	伊 達 功 だ て いさお
学位の種類	経 済 学 博 士
学位記番号	論 経 博 第 12 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	トマス・モア ユートピア研究

論文調査委員 (主 査) 教授 出口 勇 蔵 教授 堀江 英 一 教授 堀江 保 蔵

論 文 内 容 の 要 旨

主論文は、16世紀イギリスのヒューマニスト、トマス・モア Thomas More の「ユートピア」に関する一研究であって、3章からなる。

第1章、ユートピアの系譜では、古今東西のユートピアについて一般的にみられる属性を明らかにしようとして、それらを非現実性・情緒性・逃避性・孤立性・回顧性および思弁性の6つとする。

第2章、「ユートピア」の内容分析は本論文の主な内容をなしている。著者は克明にモアの著述の内容にそくして、11節に分けて展開し、多くの引用文を挿入して、政治・経済・家庭・教育・文化・宗教などについての論旨の解釈をのべており、読者に、原著を再読するの感を与える。

第3章は、第2章において述べられた諸論点のうち、著者がとくに関心をもつ2つの論点を取りあげて論じる。1つは近代社会主義との思想上の関係の問題であり、2つは宗教的寛容の問題である。

参考論文として提出されたものは

「トマス・モア『ユートピア』研究序説」、「トマス・モア『ユートピア』分析の視角」および「ヘクスターの『ユートピア』論」の3論文であるが、著者にはこの他に「トマス・モア『ユートピア』研究におけるカウッキー・チエムバーズ・エイムズ」と題する論文がある。

これらの論文はいずれも、著者が主論文をかきおえてから執筆したものであって、諸外国およびわが国における、最近にいたるまでの「ユートピア」に関する諸研究者の研究業績について論評を加えたものである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

およそユートピア思想は、社会思想の中で特異な地位を占めるものであるが、しかし、それは時をえらばず所をとわずに現われるという性質をもつものである。それだけに、社会思想史の一課題としてユートピア思想の研究をとり上げることは、一見容易にみえて、実は大変困難なのである。なぜならば、ユー

トピア思想の研究の名の下に、研究者の、社会に関するほしいままな感想や希望が入りまじってきて、学術研究であるのか社会評論であるかがはっきり区別できなくなるおそれがあるからである。

主論文においては、著者は最近のトマス・モア研究を考慮することなく、もっぱら自分の考えるところを抛りどころとして解釈を加えている。そして著者の解釈の結論を一句で表現すると、主論文の最後にいっているとおり、「貴重なる真実を内包するところの、偉大なる冗談だ」ということになる。

しかし冗談として単純に片づけるには、「ユートピア」は偉大な社会思想の諸要素をあまりに多くもちすぎている。著者の解釈がこの点をかえりみて克明に行なわれているのは、当然のことである。架空の人物、ヒスロデイが物語るユートピアの社会は、共産主義社会であるが如くであって、一面では私有財産の社会的意義と承認しているところもあり、人間の平等を主張していながら、奴隷の存在をも認めているなど、首尾一貫した社会思想とはいいがたい諸要素を含みながら、しかもヨーロッパのヒューマンイズムの立場からみた社会観として、はなはだ魅力に富んだ叙述になっている。この次第は申請者の叙述においてきわめて明らかである。

しかし、主論文において参考とされた他の研究業績が古くまたその数もすくないので、著者の立場が現在の学界において占めるべき立場が明白とならず、「ユートピア」研究史上における著者の立場は不明のままである。これが主論文について指摘されねばならぬ重要な欠陥である。

しかしながら、著者のその後の研究成果はあたかもこの欠陥を補っている。

モアの研究は、諸外国においては、第二次大戦ののちににわかに再燃した観がある。伝記としては、チエインバーズ R.W. Chambers の著述が大戦前に出て、新たな光を与えていたが、大戦ののちに、エームス R. Ames とヘクスター J.H. Hexter の研究が公刊され、さらに最近には、国際的な編集陣営の手にかかる権威あるモア全集 The Complete Works of St. Thomas More がアメリカから出るという勢いであって、現代の研究者はこれらの研究をふまえて自分の立場を明らかにする義務を、学会に対して荷なっているのである。申請者はこの点を反省したためか、以上の諸外国の研究を限なくたずねて、それらの見解を紹介するとともに、自己の立場を豊かにするための素材とした。のみならず申請者はまた、わが国における戦前・戦後の諸研究についても同様の検討に乗り出して、その結果を参考論文において発表している。

さて、著者の「ユートピア」研究のこれまでの結果は、必ずしも斬新なものが実のっているとはいえない。結論に折衷的なところが多分にあって、著者独自の立場が明確になっているとはいえないからである。またモアの社会思想の研究のためには、モアの他の著述、なかでも書簡についての研究は欠かせないはずであるが、この方面へは研究は延びていないからである。この点で、調査員は不満を感じないわけにはゆかない。また社会思想一般にたいする著者の見解が特に優れたものがあるとも思えないことも、調査員を満足させていない。

しかしながら、他面からいうと、著者が主論文においてしめしている見解には、最近の外国の諸研究の成果とほぼ同じものがあることを物語ってもいるのである。「ユートピア」の執筆の事情から、第1編および第2編の内容を、執筆の時について確定することは、最近のヘクスターの業績によって確定したといっているが、著者の解釈もまた偶然にもその結果に近いものになっているし、モアの思想をば近代社会主

義そのものとしていない点で、カウッキーの見解に同じていない点もまた、最近の研究成果と一致しているといえるのである。

著者の論旨の展開は、独自の立場から生まれる明快さをもつとはいえない。けれども、行文は流暢であって、読者を相当たのしませるに足るものをもっている。これもまたこの研究に積極的な評価を下すことのできる一要素である。

なお、主論文においては「ユートピア」研究の文献の表示が不完全であるが、参考論文においてはその欠陥も補われている。これもまた学位請求論文としては至当な成果と考えられる。

要するに、申請者の研究は、主論文と参考論文とを一体として扱うときに、日本における「ユートピア」研究のこれまでの成果をとり入れ、外国における最近の研究を参考にしながら、行なわれた独自の研究というに値いし、わが社会思想史学界につくす貢献もまた相当のものがあるということができよう。

以上の理由によって、本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。